

人はなぜ海を見続けるのか

巨大防潮堤を超える民俗

●文・写真：川島 秀一（東北大学災害科学国際研究所シニア研究員）

東日本大震災の津波被害を受けて、東北の太平洋岸で一斉に巨大な防潮堤の建設が計画されました。場所によっては、その必要性を疑う声が当初からありましたが、結果として多くの地域で、海沿いに延々と背の高いコンクリートの壁が続く風景が生まれました。震災前から東北を歩き、人々の暮らしを見つめてきた川島秀一先生は、気仙沼出身です。最近は漁船に乗り込み漁師の手伝いも始めたという民俗学者の目に、今の東北の海辺はどのように映っているのでしょうか。大震災から14年目を前に、思いをつづっていただきました。

イメージ写真

はじめに

列島各地の漁師さんに出会って話を聞きながら、漁業のことなどを教えてもらう仕事を続けていると、調査を始める段階でよく助けていただく場所がある。もちろん、昔からの漁業をよく知っている漁師を紹介してもらうには、各地の漁協や民宿の親父さんも実に的確である。しかし、それでも仕様がないうち、ぶらぶらと漁港や市場を歩いていると、使い古した椅子やソファを持ち出した所に、海を見ながら談話をしている一団がいて、そこで必ず、会うべき漁師さんの名前を皆から教えてもらえるのである。

この場所には、主に現役を退いた漁師さんたちが、夏には涼を求め、あるいは一人暮らしの漁師は仲間と会話をするために足を運んでいる（写真1）。貴重な情報交換の場所でもあろうが、さまざまな漁師が持っている政治時評や寸話も含めて、海を見ながら語り、あるいは聴くこと自体を楽しみに集まっている。いささか小さなことな

のかもしれないが、海と人間との関わりを考えるには、この場所からしか出発できない。ほとんどの椅子やソファは一律に海に向けて置かれており、海に背を向けて語っている人は少ないからである。

人間はなぜ海に向き合い続けるのであろうか。本稿では、この自問を深めながら、逆に海と人間との間に横たわる構造物の意味について問い直してみたいと思っている。

海を見つめる生活者の目

民俗学者の折口信夫は「どこで行き^{たお}斃れてもよい旅人ですら、妙に、遠い海と空とのあわいの色濃い一線を見つめて、ほうとすることがある」^{（注1）}と書いた。折口はそのような「はるかな波路の果てに、わが魂のふるさと」^{（注2）}でもある「常世」を発見しようとするのであるが、本稿で採り上げるのは、文人の感傷ではなく、海を生活の場とする者たちの目であり、心意である。

また、民俗写真家の田辺寿男^{たなべ としお}は、高知県安芸郡芸西村^{あきぐん げいせい}長谷寄で、1mくらいのコンクリートの防波堤の上に両手を乗せて海を見つめている漁師夫婦の写真を撮影し、「海辺は憩の場所」と題して、「暇さえあれば手紙でも待つように海を眺める習慣がある」^{（注3）}というコメントを付けている。「手紙でも待つように海を眺める習慣」という言葉でもって説明しているのが注意される。その海を眺める行為の背景に、海からの「寄りもの」を待つ心意を潜ませているからである。

折口信夫も前述した文章の中で「そうした無^ぶ聊^{りょう}の目^めを睜^みらせるものは、忘れた時分にひょっくりと、波と空との間から生まれて来る——誇張なしにそう感じる——島と紛



写真1 徳島県海陽町の漁協に集う漁師たち。車椅子に乗った人も来る（2002.7.21）

れそうな^く割り舟の影である」(注4)と述べている。宮城県気仙沼市の漁村では、子どもがオモチャや漫画を欲しがって泣き続けているときなどに、「蒸気^く来っから」と語って慰めたというが、ここでいう「蒸気」とは、湾の入口の水平線から入ってくる「三陸汽船」という運搬船のことであった。

寄りものなどを待っている心は、海を見続けている人々が本来抱く感情であろうが、それは何も物体だけでなく、「手紙を待つ」ような希望にも似た観念的なものであったとしてもおかしくはない。その対極にあるのが、漁に出るかどうかを決定する実利的な「日和見^{ひよりみ}」のために、海を見続けることであろう。和船時代には、それは海の雲立ち(雲の形や動き)で明日の天気をみたものであるが、漁場が遠い場合には、前夜のうちに判断しなければならず、それは目ではなく、耳による風や波の「鳴り聞き」であった。船元(船の経営者)が集まり、代わる代わる高い場所に立って耳をそばだてたという(注5)。一つの場所に何人かが集まることは、昼間の日和見と同様である。

宮城県南三陸町歌津の阿部倉善^{うたつ あべ くらよし}さん(昭和25年・1950年生まれ)は、地元の中산で養殖などの漁業で生活していたが、その後、自宅のあった所は東日本大震災で災害危険区域に指定され、移転せざるを得なくなった。しかし、漁業を継続したいと願っていた阿部さんにとって一番の危惧は、かつての自宅と異なり移転地からは「海が見えなくなる」ということであった。毎日の天候、浜の人々の船の出し入れの様子などの判断によって、海に出る生活を営んできたからである。そのために移転地は、

木々の合間から港の様子が見える所に決め、現在も、そこでの観察からその日の漁を判断している。とくに、そこから見える松崎という岬に上がる白波を見て、波の高さを確かめるとい^う(注6)(写真2)。

また、宮城県石巻市桃浦^{こうやつよし}の甲谷強さん(昭和4年・1929年生まれ)によると、震災前からタコカゴ漁に従事していたが、いつも出かける前に自宅の窓から見える弁天島という小さな島に波が折れる様子を見てから出漁を決めたという。ところが、震災後、実験的に水産特区を試みた「桃浦かき生産合同会社」の3階建ての建物が立ち、弁天島が見えなくなってしまった。「昔から海岸には高い建物を建てないことにしていた」と語る甲谷さんにとって、毎回、不自由な思いをしている(注7)。

1mくらいの防波堤であれば、海を遮ることはないだろう。防波堤のそばからは、車椅子に乗った人も海を見ることができし、堤の上に座って見ることもでき得る(写真3)。しかし、15.5mの高い防潮堤でも、その上に小屋を建てて、それでも海を見続けることを止めない所があった。岩手県普代村太田名部^{ふだいむら おおたなべ}の防潮堤である。

小屋を建てた防潮堤

防潮堤に遮られた太田名部の集落を歩いていた時、何人かのおばあさんたちが道路脇で話し合っていた。尋ねれば、これから防潮堤の上に建っている小屋へ行くところだという。海を見ながら話をするのが気持ちがいやらだともいう。前日に太田名部に着いたときから気になっていた小屋であったが、太田名部の太田文吾^{おおた ぶんご}さん(昭和8年・1933年生まれ)によると、それは「見張り小屋」だという。

おそらくこの小屋は、筆者が日本のあらゆる漁村で見かけてきた、漁港や市場のそばに海に向かって置かれている、使い古されたソファや椅子と同じ役割を持っている。たとえ一人であつても、ただ何となく海を見たさにやって来る。人間が海からの光や風に生きる力をもらっていることがよ



写真2 毎朝、海の見える場所に立つ阿部倉善さん(2025.1.16)



写真3 低い防波堤だと、車椅子の人も海が見られる(沖縄県池間島、2016.3.21)



写真4 防潮堤の上の小さな小屋に、おばあさんたちが集まって、海を見ながら談笑している(岩手県普代村太田名部、2016.3.4)

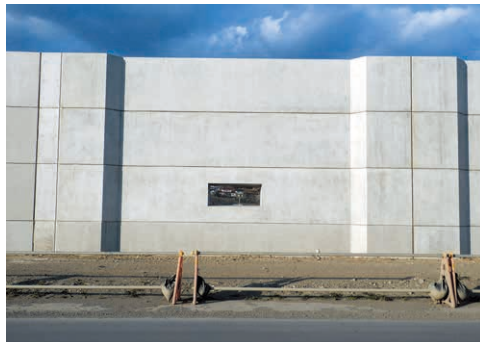


写真5 小窓をくり抜いた防潮堤
(宮城県気仙沼市、2016.3.26)



写真6 防潮堤の小屋に飾られていた、子どもたちが縄跳びをしている写真

く分かる所でもある。太田名部のおばあさんたちも、時間があれば、午前と午後の2回も、防潮堤の上に居るという。防潮堤の目的外使用にならないように「見張り小屋」としたものの、漁の様子を「見張る」という実利的な目的ではなかったことが逆によく分かる(写真4)。

それは、防潮堤に小窓を切り抜いて海を見せればよいというような、生活感情を無視した幼稚な発想とは対極にある場所でもある(写真5)。たとえ防潮堤が、自然災害後に起こる「復興災害」と呼べる人災になったとしても、人間にはそれさえも超える力がある。

それだけでなく、『太田名部物語』^(注8)には、防潮堤の上の装飾の突起に腰を掛け、会議をしている平成6年・1994年の「漁師達の会合」という写真も掲載されている。また、太田名部の小屋に飾っている写真には、防潮堤の上で縄跳びをして遊んでいる活き活きとした子どもたちが写っていた(写真6)。今はなかなか見つけることができないが、以前の子どもたちは、よくこの海辺を遊び場^{やないし}にできた(写真7)。山口県柳井市の平郡島^{へいくんとう}では、客船が来るときに子どもたちが1mくらいの防波堤の上に腰かけ、寄りものを出迎えるように、目を輝かせていた(写真8)。これらの漁師たちの青空会議や、子どもの遊びや関心も、

どうしても海のそばでなければならない深い理由があったものと思われる。

この子どもたちと海との関わりも、大人たちが何気なく海のそばに集うことと共通するものがあるだろうが、このことを重視し、あるいは海で働く親の姿を子どもが見て育つことの価値を選択して、防潮堤を陸側に移動し、浜自体を残すことを決めた集落もある。宮城県南三陸町歌津の寄木^{よりき}である。

浜の空間を残した防潮堤

寄木は、人口減少により小中学生がたとえ5人になっても、小正月の大漁を願う、ササヨと呼ばれる「唄い込み」行事を集落を挙げて支えている所である(写真9)。ここでも、以前は大潮の時に広がった砂浜の上で、子どもたちが相撲や駆けっこをして遊んでいた。つながれている漁船のある所で隠れん坊をした時などは船槽などを用いた。エンジンルームに隠れて油だらけになった子もいた。とくに船止めしているササヨのときは、船で遊ぶ絶好の機会であった。

この寄木では、震災後の防潮堤については、子どもたちだけでなく、浜の暮らしそのものを全体的に残すため



写真7 港で遊ぶ子どもたち
(淡路島・福良、2002.12.29)



写真8 旅客船が来ると子どもたちの顔が輝く
(山口県・平郡島、2002.5.4)



写真9 「大漁唄い込み」を全戸に歌って歩くササヨ行事
(南三陸町歌津、2015.1.15)

に、当初の計画よりも陸の方に80～100mほどセツバックして、一部を山に当てた短い防潮堤を両側に2つ造ることで合意を得た地域である。高さ9.08mの防潮堤を浜から遠ざけたことで、逆に高台移転をした場所からは、浜の様子が手に取るように見えるようになったのである(写真10)。防潮堤の高さだけを論じやすい議論の盲点を突いたような、住民たちの決定であった。

しかし、寄木はワカメなどを中心とした養殖業を営む集落で、その繁忙期には先輩である集落のお年寄りたちも手伝っていたのが、震災後には高台の住居から敢えて浜に下りてきてまで手伝う人は少なく、以前のような浜のにぎわいは見えなくなったという。

また、当初の護岸工事においては、地震で沈降した高さを復旧するために1mほど^{かさ}嵩上げしたが、その後少しずつ隆起したために、現在はむしろ干潮時に海面が低すぎて船に乗れない状況に立ち至った。元の高さに戻すこともできず、ハシゴを設置してもらって対応している状況である。このことは、寄木だけでなく、近辺の浜々も同様の対応をしている。

さらに、日本の環境影響評価法に基づく環境アセスメントは、道路、ダム、鉄道、空港、発電所など13種類の事業のみが対象であり、防潮堤などのように、海岸法に基づく海岸で行われる事業はその対象にはなかったため、これから多くの環境問題を生み出していくだろうことは必至である(注9)。

おわりに

震災後の三陸沿岸を中心とした浜々の幾つかは、津波時の避難路さえ整備されれば防潮堤は不必要と判断したが、それに対して行政側から、防潮堤がセツでなければ道路を建設できないと強要され、止むなく防潮堤の建設を呑んだということを、筆者はたびたび耳にしている。以前に住んでいた場所は居住禁止区域となり、今では守るべきものが何もない所に、巨大な防潮堤が建っているという浜も多い。

東日本大震災後、集団ヒステリーのように一気に建て続けた、海岸の巨大な構造物。これを再度、検証しな



写真10 防潮堤をセツバックして建てたので、逆に高台からは浜の様子が手に取るように見える(南三陸町歌津、2025.1.15)

ければならない時期を迎えている。行政も一部の工学系の研究者も、なかなか自分たちが主体的に建てた構造物を、最後まで責任を持って振り返り続けることは少ないが、海辺の傍らに住む人々が震災直後に本来はどういうことを望んでいたのかを、今ならば、まだ聞き集めることができるものと思われる。

注1: 折口信夫「ほうとする話——祭りの発生 その一」『古代研究Ⅱ 民俗学篇2』(角川文庫、2017[初版は1975]) 176p

注2: 折口信夫「舩が国へ・常世へ——異郷意識の起伏」『古代研究Ⅰ 民俗学篇1』(角川文庫、2017[初版は1975]) 7p

注3: 田辺寿男「高知の民俗写真1—」(橋田恵明、1993) 32p

注4: 注1と同じ。175p

注5: 小山亀蔵『和船の海』(唐桑民友新聞社[宮城県気仙沼市]、1973) 126～127p

注6: 2025年1月16日、南三陸町歌津の阿部倉吉さんより聞き

注7: 2024年11月14日、石巻市桃浦の甲谷強さんより聞き

注8: 『太田名部物語—この地に生きたすべての人に—』(太田名部物語をつくる会、2006) 75p

注9: 「特集このままでいいのか? 防潮堤計画」『自然保護』534(日本自然保護協会、2013) 参照



川島 秀一 かわしま・しゅういち

宮城県気仙沼市出身(1952年生まれ)。法政大学社会学部卒業。博士(文学)。東北大学附属図書館、気仙沼市史編纂室、リアス・アーク美術館、神奈川大学特任教授、東北大学災害科学国際研究所教授などを経て、現在は同研究所シニア研究員。元日本民俗学会会長。『海と生きる作法—漁師から学ぶ災害観』(2017)など著書多数。漁業や災害も含めた、海と人間の関係についての民俗学的研究を続けている。